私はヤクザが好きです。

美好姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私はヤクザが好きです。

【Ｎコード】
Ｎ５７９５Ｎ

【作者名】
美好姫

【あらすじ】
東君、今どうしてるのかな…
「転校生を紹介するぞ！！はいれ。」
「！！」
それは同姓同名の東！
しかし、東は記憶喪失になって戻ってきた。
いったいどうなる…？

1話目＊東君

２０００年７月

「おいてめぇ、ずらかせや」
「やっ、あのっ…」
「かせっつってんだろーが、ごらぁ！」
ゲシッ！
「――――おふっ！」
「てめぇら、弱いものいじめしてんじゃねぇぞ、ごらぁ！」
「んだと！てめぇ…！」
「く、組長！こいつって、西中で有名な…アイツじゃねぇですか！」
「っ！なんだと？！し、しょうがねぇ、ひくぞ！てめーら、覚えとけよ！」

「あっ、ありがとうございます…。」
「…。」
「ここ怪我してるじゃありませんか！私の家にきてください！こっちです！」
「…いい」
「や、でもここ怪我してるし…」
「いいっつってんだろぉが！」
「ダメです！」
ぐいぐい
「こっちです。」
――――――――――――――――
「それじゃあ、いきますよ…えいっ！」

「い〝っでーーー（泣）！」
「もう少しですからね…」
「もういいからーい〝っでーー！…もういいですよー（泣）」
「よしっ！これでＯＫ！」
「あ〝り〝がどよ〝…」
「そーいえば、あなたの名前は？」
「俺は、東（あずま）！御駈迩（みくに）東だ！お前は？」
「私は、波瀬川（はせがわ）　椿（つばき）です。よろしくお願いします！」
「ぶふっ！ガキの自己紹介みてぇ」
「なっ！なにそれ！これから仲良くしようと思ってたのに！」
「ジョーダンだ、ジョーダン！よろしくな？椿！」
「…うん。」

2話目＊自己紹介？

「ごめん。さっきはいきなり強引に引っ張って、ここまでつれてきて…」
「あ？別にいいし。逆に俺が怪我したことすぐに気付いたこと、すごいんじゃねーか？」
「そっ、そうですかね…／／／」
「ぶっ！顔赤っ！」
「なっ、そんなことないしっ！」
「隠しても無駄だぜ～？」「うっ、うっ…」
「おっおい！な、泣くなって！」
オロオロ

「うっ…。」
「ほっほら、あれはジョーダンだからさ」
「ぷっ！あっはっはっはっ！引っかかった～♪」
「お前～？」
「あは！」
「まてー！」
「ほらほら！全然追い付けてないよ～？」
「？？？？」
「私に勝てるわけないじゃん！私、五十メートル走7．8だからね？」
「俺だって、7．9だし！」
「勝ててませんけど？」
「あのときはな、たまたま腹が痛かっただけだ！」
「それでも、今私に追い付けてませんよ～？」
「う〝っざっ！」
「ほらほら～♪」

「う〝おー！！！」
「あははっ！」
――――３０分後――――
「はぁーはぁー…もう無理…」
「づ、捕まえた…。」
「こ、こんなに運動したの、久しぶりだよ…」
「お、れもだ…。ケンカしてもそこまで長引かないし…」
「ケンカしちゃだめだよ！」
「…！」
「だって、ケンカしたら、怪我するだけだもん！」
「…わかってねぇ」
「へっ！」
「椿はわかってねぇんだよ！」
「…！？」
「俺をそこら辺のやつと一緒にすんなっ！」
「！！」
「俺は、ダチを守るためにケンカしてる。ダチがやられそうになったら、俺がフォローするし、俺がやられそうになったら、ダチがフォローしてくれる。別に俺達からケンカふっかけてるわけじゃねぇからいいだろ。」
「…。」

「俺帰る。怪我手当てしてくれてサンキューな、んじゃ」

「っ…！」
ガチャリ

「うっ…くっ…んっ…」

涙が、次から次へと出てくる。「とまんなっ…うっく…えっく…」

～♪

「？」

どこからか、音楽が聞こえてきた。

「！！」

それは、ケータイだった。

しかもそれは、東君のケータイだった。

「！」

ニヤリ…

メールがきてんじゃん！どれどれ…？

…全部男友達からじゃん！つまんないの！でも、ここにケータイがあるってことは…

ニヤリ…――――

いやいや、大丈夫か？自分よ。別にケータイを取りにきたところで、どーする…？

私には、何にも得じゃないぞ？

…。

まぁいいや…私が気にすることではない。

――――――――――それから、二日三日たったが、東が来る気配はまったくしなかった。

3話目＊はぁ！？（前書き）

投稿、遅くなってごめんなさい？？

執筆はしてたんですけどね？

3話目＊はぁ！？

「っはぁ～…。」
あれから、一週間たった…でもいまだに、携帯取りに来ないんだけど！？
いい加減、メーワクだし？
いっそ捨てちゃおっ！って思うんだけど…なぜか捨てれず、一週間たってしまったわけですよ。はい。

「っはぁ～…。」
「んもぉ！！椿ってば！無視しないでよ！」
「っはぁ～……！？か、薫！」
「さっきからずぅーーっと！呼んでんのに、気付かないんだもん！」
「ごめんごめん！ちょっと考え事してた？？」

彼女は、井上薫
私の幼なじみで彼氏持ち！
おちゃめで、かわいーのよ！多分彼氏も、そこが好きになったんじゃないかな～？

ピンクとか、レースとか大好きな子、ぶりっこまではいかないから、かわいいんだよね～

ニヤリ
※薫です

「あの男の子のこと？」
「うん…って、知ってたっけ！？！？」
「あんたこの前教えてくれたじゃん！もー忘れたの！？」

「あはははは??」
しょーじき、教えたこと、すっかり忘れてた。
「おーすっ！はよ！椿と薫！」
「あっ！おはよっ！美咲！ちょっときーてよ美咲！また椿がさぁ、ため息ばっかりついてんだよね～」
「またかぁ～？いい加減あきらめろよ、その男～」
この子は、藤村美咲
この子も、めちゃ可愛くて、キレイなんだけど…元ヤンで『無羅咲死鬼不』（ムラサキシキブ）ってとこの頭だったんだよね…
今は違うけど。
でも、喧嘩上等ってかんじのオーラがでてるかな？
金髪で髪の毛長いんだ！ストレートでうらやましい！
男口調だけどね

「…あっ、美咲…おはよ…」
「くらいじゃねぇか～しっかりしろよ～？」
「あ、ははは～」

キーンコーンカーンコーン

「「んじゃね！」」
「ばい！」

それから、私は授業を受けたが、すべて右から左だった。

キーンコーンカーンコーン

「椿！屋上で昼飯食べようぜ？」
「うん。」
「薫も食べようぜ！」

「うん！！」そうして私たちは屋上へと向かった。
やはり、屋上は殺風景だから、人はいなく私たちが占領しているような感じだった。
「うはっ！今日もだっれもいねぇ～いつみても、笑えてくるわぁ」
「確かにね～」
「…。」
「「…。」」
「じゃあ、食べよっか。」「うん！！」
「おいひー！」
「だな～」
「だねっ！」

もー！こーなったら、ヤケ食いだ！！

「おっ！急に元気になったね～」
「うん！！うじうじすんのやめた！」
「そうだよ～椿は元気が取り柄なんだから！」
「薫ちゃぁん？言っていいことと、悪いことがあることぐらい、わかってい・る・よ・ね　？」
「たしかに、椿はそうだな～」
「もぉー？2人ともからかわないでよ！」
「「あはははは！」」

キーンコーンカーンコーン

「あっ！予鈴なったよぉ！帰ろっ！」
「走るぞ！」
「あっ！待ってー！」

パタパタ――――――

それから、五時限目の数学、六時限目の歴史と私はぼぉーーっとしながら、授業を聞いていた。

「――――き…ばき…――――――――つーばき――――椿！！！！」
「――――――っはぁ……？」
「もぉ～授業終わったよぉ？」
「うそっ！？」
「うそじゃねぇぞ？」
「起こしてくれて、ありがとね～薫、美咲？」
「んじゃ、かえっか！」
「うん！」「椿～お呼びだよ～」
「ん～？誰～？」
薫が、指を指している方を見ると…
男の子がいた――――――
「美咲～一緒に靴箱で椿のこと、待ってよ～」
「そーだな！」
「じゃぁ、頑張れよぉ」

――――――――――――――――――――

「俺の名前は宮崎　光一『みやざきこういち』だ」
「はぁ…」
「俺と付き合ってくれないか？」
「はぁ…！？無理ですよ！いきなり知らない人に告られても…」
「そうか…俺諦めねぇからな！！」
「はぁ…」
変な人…？
告られた…のは、わかったけど…？
まっ、薫と美咲のとこいこーっと！

4話目＊帰り道

「薫～美咲～お待たせー！ごめんね～遅くなって」
「いいよぉ？」
「以外と早かったじゃん！」
「そっか？まぁいいじゃん！帰ろっ！」
「おう！」
「うんっ！」

―――――――――――――――

「で、さっきの男の子、どーした訳よ？」
「どうしたも、こうしたもないけど…」
「うっそだぁ！絶対あれは告白でしょ！？返事はどーしたの？」
「えっとーー…？」
「どーせ、断ったんだろー？」
「まぁ…ね…」
「えー！！もったいない！あの人、学校の中ではめちゃめちゃイケメン軍団の中に入ってるのに！」
「なんだそれ」
「私のイケメンノートの中の1人！宮崎光一君だよぉ？」
「ふぅんー…。」
「冷たっ！」
「だって、確かにカッコいいかもしんないけど、うち的にはちょっとねーあわない気がしてさー？」
「うわ～男たらしだわ…」
「美咲までそんな事言うの～！」
「美咲が言ってること正しいんだよぉ！」
「そうかなー？」

「「そうだよ！！」」
あはははは！！
「んじゃ、うちこっちだで、」
「「美咲バイバイ」」
「んっ！」
――――――――――――――――
「で、付き合うわけぇ？」
「だから、付き合わないよー」
「なんでよぉ！」
「でも、宮崎君？ってイケメンなんでしょ？私なんかが付き合ったら、評判とかがた落ちすると思うし、きっとファンクラブの人たちの目…ヤバいと思うよ？」
「…（うっ！）ま、まぁ、宮崎君は王子様系男子だから、笑顔で《この子は、僕の大事なひとなんだ…だから手はださないでくれる…かな？》とか言ってくれるんじゃないのぉ？」
「そうかなぁー…」
「んじゃあ、ばいばぁい？？」
「バイバイ！」
宮崎君かぁ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5795n/

私はヤクザが好きです。

2010年12月18日09時10分発行